

た。院外治療の紹介もされた。呉秀三が巢鴨病院院長となつてから、作業治療は体系的なものとなつた。森田正馬もそれにたずさわつた一人で、彼の名を冠された治療法の源の一つはこのときの経験であつた。一九〇〇年の精神病者監護法は入院は監禁であるとしていたが、一九一九年の精神病院法によつて、監禁的でない入院治療が公認され、作業治療にもあつたらしい地帯がひらかれた。同年に巢鴨から移転した松沢病院で加藤普佐次郎は、みずからもモッコをかつて作業治療にあつた。加藤は作業治療とともに開放治療を強調し、またうたい・おどつて患者をたのしませた。

加藤の仕事はかれの学位論文となつたが、同僚のなかには「土方医者」とかれをさげすむ人のほうがおほかつた。他院での作業治療は、内職的なものや農耕にとどまつていた。

長山は一九一九年に府立大阪医科大学を卒業し、神経病理面の仕事によつて学位をえ、助教授候補であつた。一九二九年にドイツに留学し、ミュンヘンでシピールマイエルについた。ところが同年九月ハンブルクのワイガント教授主宰の講習会でジモンの作業治療、コルプの院外保護の講義をきくにおよんで、神経病理学をすてた。母校の和田教授は長山の縁つづきの人だったが、和田は長山にひどくいかつた。

一九三〇年一二月に帰国してから長山は中宮病院医員(のち医長)として、作業治療にとりくむとともに、一九三一年からヨーロッパの精神科作業治療および院外治療について精力的な紹介をはじめた。それだけでなく、院外保護の試みもした。

といつても、作業治療が制度として確立されていた松沢病院とちがつて中宮病院では、それにたずさわる従業員もわずかで、長山の仕事はたいへんにくるしいものであつた。松沢病院で加藤のあとをうけついで菅修とたまにあつてかたりあうことは、七月七日に二星がめぐりあう思いであつたとつたえられる。院外治療については松沢病院副院長であつた齋藤玉男(冷泉禎太郎名義のものもある)も紹介しはじめた。

長山は不遇のうちに一九四九年に中宮病院を退職し、わすれられた存在になつていた。

精神疾患患者の院外治療が重視されてきている現在、はやすぎたこの巨人の足跡をたどりなおしたい。

(平成五年一月例会)

金沢貞顕文書の医史学的研究

樋口 誠太郎

一、はじめに

金沢貞顕(弘安元年・一七七八〜元弘三年・一三三三)は、金沢北条氏の四代目として、称名寺や金沢文庫を充実させる上で功績のあつた人物であると共に、すぐれた文人武将であつた。

しかし、鎌倉幕府の滅亡にあつては、執権北条高時一族と共に鎌倉葛西谷の東勝寺で自刃して果てた。

今回発表する要点は、金沢貞顕が称名寺二代長老銀阿に宛てた書状が当寺に残る『宝寿抄』という仏教書の「紙背文書」として残っていたものが平成三年四月に『金沢文庫資料図録』書状編Ⅰとして刊行されたので、これを中心に、当時の高級武将が病氣に對しどんな医療を行っていたかが判る文書の事例としてとりあげてみた。

鎌倉武士といえは、質実剛健、弓馬の道にはげみ病氣の方がさけて通りそうであるが意外に貞顕の銀阿宛の書状は自分の病氣や家族の病氣に悩み祈禱を願ったりしているものが目立っているということである。

二、金沢貞顕文書中の医療関係記事

このことに関しては、かつて昭和四七年に『鎌倉時代医学史の研究』と題して服部敏良氏がとりあげておられる、当時は現在の様に整理されていなかったのか、貞顕の書状も五通ほどしか引用されていないが同書の第二章第五節の金沢文庫古文書の医学的考察は、今回の発表に大いに参考になった。

この文書（宝寿抄の紙背文庫）が金沢貞顕から称名寺二代長老銀阿に宛てたもので、内容を大別すると、貞顕が銀阿の病氣見舞のために出したものと、貞顕が家族や自分の病氣について銀阿に伝え祈禱などを依頼したり対策を相談したりしたものに分けられる。

家族として出てくるものは、長男の貞将、顕助、貞将夫人（出産のことで出てくる）、孫の忠時などである。貞将は六波羅探題などに就任するが貞顕の書状を見ると病氣をよくしてい

たようで、箱根湯本へ湯治に出かけたりしているし、貞顕の書状中に貞将の病氣を治すために祈禱をしてほしいと銀阿に依頼している。

病氣の表現には、所労とか違例ということばが用いられた。相手によって「御」をつけている。例としては「御腹の氣」、「御痲病」、「御目勞」などがある。

こうした病氣に対する医師は金沢貞顕ほどの上級武将になると何人もの医師にかかることができた様で「諸医」などということばが見られる。「医師」は当然のことで「長周朝臣」とあり、おそらく丹波長周のことで当代の超一流の医師であり、一般人ではとても診てもらえないような医師にかかっていたことがうかがわれる。

また見舞品としては「リング」などが登場している。現在の西洋リング系のものとは異なるが、こうしたものが食べられたことも注目されよう。

しかし、当時は病氣にかかれば、ひたすら祈禱しかないことも一面の事実であった。こうした貞顕の書状を見るといろいろな病名が登場していることも注目して良いであろう。

三、まとめ

今回の発表では全ての書状をとりあげることとはできなかったけれども鎌倉時代末期の上級武将がどのような生活をしていったかがわかる。当時から教養の高い金沢貞顕のような武将でも病氣にかかったり、家族の病氣に對しては医師が大丈夫だと言つても銀阿のような高僧に祈禱を依頼したり、相談

したりしている。

ここに当時の人びとの生活と宗教の強いかかわりあいを見ることができると。

(平成五年一月例会)

明治初年の私立医学校「済生学舎」・ 慶応義塾医学所・成医会講習所」について

唐 沢 信 安

官尊民卑の時代に私立医学校として、明治初期から中期にかけて繁栄した済生学舎、慶応義塾医学所、成医会講習所の発展史について述べることにする。

一、済生学舎

現在の日本医科大学の源流の「済生学舎」は、明治九年四月九日、長谷川泰により本郷元町一丁目六十六番地(現順天堂大学裏)に創立された。初期の教師は、長谷川泰(元第一大学区医学校長・三十三歳)と弟の長谷川順次郎進医学士・同郷の山崎元脩進医学士の三人の教師を中心に開校された。

明治十七年には全国から医学を志す学生が集まり、四百八十四名在学し、教師は十六名に達した。(長谷川泰は明治十五年に学校を湯島四丁目に移転している。)更に明治十七年に「東京医学専門学校・済生学舎」と称し、東京府知事と文部省に届出ている。

学内も次第に充実し、吉岡弥生が明治二十二年から二十五

年まで在学している。野口英世も明治二十九年十月より三十年八月三十日迄、約一年間済生学舎に学んでいる。

明治三十一年暮から明治三十二年にかけて「大日本医会」(会長高木兼寛・会員四万人)から「医師会法案」が国会に提出された。この時、東京大学医科大学の教授入沢達吉、青山胤道等六十名は「医師会法案反対同盟」を造り激しい反対運動を起こした。その結果貴族院で否決され廃案に持ちこまれた。

反対同盟は「明治医会」と改称し、私立医学校撲滅運動(医学教育の統一論)を起こし、済生学舎の廃校を目標にして高等教育会議で協議をした。明治三十六年三月「専門学校令」を勅令の型で発布し、済生学舎の存続を文部省は認めなかった。独り苦しんだ長谷川泰は、ついに「廃校宣言」を出した。

二、慶応義塾医学所

現在の信濃町にある慶応大学医学部は大正六年に造られたものである。

しかし明治六年十月に、福沢諭吉は高弟の松山棟庵と協議の上、慶応義塾の一分科として、松山棟庵の自由裁量の下で医学科を設けた。修業年限は二ケ年で、主としてハルツホルンの教科書を用いた。医学所は新宮涼園、杉田武、松山誠二等が助けた。七年間続いたが、明治十三年本校の慶応義塾の経営が急激に悪化し、経営危機に陥つたため、慶応医学所は廃校となった。その間三百余名の卒業生を出したが、西南戦争後のインフレで学生が減少し、継続不能となった。